

令和6年度滋賀県献血推進協議会 議事概要

日 時：令和7年2月3日（月）午後1時30分から午後2時45分

場 所：大津合同庁舎 7-A会議室

出席者：山田副会長、高橋委員、村杉委員、三木委員、吉岡委員、千代委員、明石委員、川西委員、石河委員、辻委員、雲根委員、金山委員、西出委員、岩佐委員、大村委員、片岡委員

中村幹事、辻幹事

（事務局）川崎課長補佐、高崎主査、成田主事、安田書記

（血液センター）杉江事業部長、中河献血推進課長

議事概要

1 令和6年度血液事業の実施状況について

委 員：学生限定献血キャンペーンでは期間内の献血者に先着でモバイルバッテリーを進呈している。せっかく献血に来ていただいたのにもらえない人がいると良くない。漏れなく配布できるようにできないのか。

事 務 局：血液センターでも同じ記念品を用意している。例年のキャンペーン参加者数から数を予測して作成しているので、ここ数年は記念品をもらえない学生はおらず、全員に渡すことができています。

2 令和7年度滋賀県献血推進計画（案）および令和7年度若年層献血推進アクションプラン（案）について

委 員：薬物乱用防止教室と連携して献血学習も行うように薬剤師に周知していきたい。県内で行われている年間の献血関係の取組が一覧になった資料があると周知しやすい。

事 務 局：献血学習に協力していただけるのは大変ありがたい。活用できる取組の資料はこれからまとめていきたいと思う。

委 員：献血推進ポスターコンクールを中止するとのことだが、代わりに何をするのか。また、インターネットを活用した啓発のこれまでの取組状況は。

事 務 局：ポスターコンクールからSNSなどを活用した啓発に切り替える。これまでより若年層に届きやすいように YouTube やInstagramでの広告を考えており、今年度試行的にInstagramで日赤が作成した動画を流してみたところである。

委 員：映画「はたらく細胞」が若者に人気のタレントを起用している。タイアップなどで啓発に活用できないか。また、令和7年度は国スポ障スポという大きなイベントがあるが、会場に献血バスを配車するなどの働きかけはできないか。

事 務 局：昨年度は日赤滋賀県支部として「翔んで埼玉」とコラボした啓発を行っている。「はたらく細胞」は近畿ブロックでコラボして良い反応を得られた。映画を見て初めて献血に来たという方もかなり多くいた。映画などとのコラボは日赤本社が動くのが基本だが、「翔んで埼玉」は埼玉、滋賀の血液センターで対応した。今後も献血に関連する映画などがあれば対応していきたい。

国スポ障スポとの連携については関係部署とも調整しつつ積極的に取り組むよう検討してまいりたい。

議 長：映画や国スポ障スポとの連携は献血のきっかけづくりには有効。何ができるかを検討してもらいたい。

委 員：若年層の人口そのものが減少している中で若年献血を増やす必要がある。若年層献血

の多い県とその要因や滋賀県が45位から28位になった要因を検証した上で有効な対策に絞って実施した方が良いのではないかと。

事務局: 10代の献血率が高い栃木など北関東から東北にかけての地域は、献血バスを受け入れられる企業が少ないため、献血バスが全ての高校を回るなど高校献血に力を入れていることがその要因。

滋賀県においては、一時期、高校献血が実施しにくくなった時期があり、若年層の献血率が下がった。その後、アクションプランの策定や議会で取り上げてもらったことにより、実施件数が増えて順位が改善した。

若年層の献血率を上げるには高校献血の実施が効果的と考えられる。今後も全高校で献血ができることを目指して取組を進めてまいりたい。

委員: 高校献血は非常に重要な取り組みである。できれば私学含めてすべての高校を回るようにしてもらいたい。

事務局: 私学もすでにいくつか協力いただいている。これからも取組を進めていきたい。

委員: 比較のために若年層だけでなく他の世代の献血率や、地域ごとの献血率の違いなどもわかるデータがあればと思う。

事務局: 世代別の献血率の数値を今後は資料の中に追加していく。地域別の若年層献血率についていうと、やはり草津や大津の南部地域で高い。高校献血の実施件数が影響するので、高校が多い地域は献血率が上がる。また、県北部では長浜地域が熱心に献血に協力いただいている。

委員: 高校献血や献血セミナーを断られた学校に対してその理由を把握できているか。

事務局: コロナ禍の時期に一度中断している間に学校のノウハウが失われたことやカリキュラムから外れてしまったことがある。カリキュラムの都合がつくように時期を変えるなどして再び実施できないか働きかけを進めている。
また、献血はできなくてもセミナーを実施できた学校ではその後、生徒が実際に献血ルームまで献血に来てくれた例がある。

委員: 高校生よりも前の中学生くらいから献血学習による意識付けを行うべきではないか。また、滋賀県も外国人が多く居住しているので、そういった方向けのポスター等を作ってはどうか。

事務局: 厚生労働省からは小中学校の時から献血意識の向上を図るよう呼び掛けているところ。県立ではない小中学校に対しては市町を通じて働きかけできないか検討したい。また、外国人向けの広報ということについては新しい視点の貴重な御意見であると思う。こちらでも何か検討していきたい。

委員: 医療の現場では輸血で命が助かった人をたくさん見ているが、そういった事例をもっと周知して啓発に活用してはどうか。

事務局: 輸血で助かった人の声を広報に活用することについては、すでに年に何件かHPには載せている。しかし目につきにくいかもしれないので、改めて広報の方法を検討していきたい。

委員: 現在県内に外国人が3万6千人くらいいる状況。外国人の献血について教えてもらいたい。

事務局: 献血者に国籍の要件は無いが、問診の必要があるので日本語の意思疎通ができることが条件になる。企業によっては通訳を付けて献血に協力いただいているところもある。
その他の要件として、外国から日本に来て4週間以上経過していること等の条件がある。

- 委員：たとえば病院の問診でもあらかじめ問診票を外国語で作っておけば診察は可能である。献血においても同様の手法で通訳が無くても献血できるようにできないか。
- 事務局：マニュアルでは服薬歴や病歴等について、日本語で聞き取りすることになっている。これを変えとなると全国的な話になるので、この場でお答えすることはできないが、中央に意見を上げてまいりたい。
- 委員：高校での献血学習は時間がないからできないと答える学校が多いとのことだが、内容によっては保健体育の授業に取り入れてもらっただけでも効果があるのでは。
- 事務局：献血セミナーは1時間とらないとできないわけではなく、たとえば全校集会やホームルームのうち10分でももらえればできる。
献血という言葉の意味は知っていても、血液が人工的に作れないことや長期保存ができないことなどは知らないことがあり、それを教えるだけでも意識は変わってくる。
- 議長：各委員から意見をいただいた。献血については将来に向かって危機感を持たないといけない。今後ともご協力をお願いしたい。